朝日新聞　2015年5月7日　夕刊　15ページ　大阪本社

大戦へ過ちの始点

敗北の序章 ノモンハン 1

村上春樹が描いた国家

モンゴルの東端で1939年5月、「ノモンハン事件」と呼ばれる紛争が起きた。

国境線をめぐる小競り合いが、旧満州国（現・中国東北地方）にいた関東軍と旧ソ連の機械化師団の衝突に拡大。4カ月間で日本側2万人、ソ連側2万6千人が死傷した。事件をやがて始まる第2次大戦の「知られざる始点」とみる研究が欧米で今相次ぐ。75年以上経ても見直しの機運が出るこの事件にひかれた。

日本兵は敵戦車に火炎瓶で攻撃を仕掛け、夜襲でソ連軍に立ち向かった。大分県別府市の佐藤栄三(97)は、もはや数少ない元従軍兵士の一人だ。暗闇に紛れて敵陣の数メートル前まではい進んで一斉に突撃し、逃げ遅れたソ連兵を銃剣で突いた体験を克明に語ってくれた。

遅れれば餌食

「不意を突かれて向かって来る相手なんて、まずいません。でも、明るくなる前に引き揚げなきゃ。遅れれば砲撃の餌食です」と佐藤は語る。

周到な準備を経てソ連軍は同年8月20日、南北約70キロに及ぶ全戦線で総攻撃に出た。佐藤がいた「バルシャガル高地」は最後の激戦地だった。

連日の猛攻に耐え、10日目の未明、大隊約300人が脱出を試みた。7日間、飲まず食わず。渇きと飢えと疲労でどこをどう歩いたか覚えていない。明け方、後方部隊と合流し、へたり込んだ。

上ノモンハン戦跡の最北端「フイ高地」から望むハルハ河。対岸に布陣した旧ソ連軍陣地（右奥）の方が標高が数十メートル高く、日本側はほぼ丸見えだった＝2014年6月、モンゴル東部、永井靖二撮影
下ノモンハン事件の最前線へ向かう日本兵＝1939年7月

戦場の「渇き」

その渇きを村上春樹(66)は「ねじまき鳥クロニクル」(95年完結)で描いた。彼が長編小説で初めて描いた戦争が、この事件だった。

『ノモンハンにはまったく水がなかった』『世の中に喉が渇くくらいつらいことはない』。従軍した本田老人は主人公オカダ・トオルに語る。

本田と戦友の間宮らは事件の前年、敵地で諜報活動中に捕まり、同行した山本は生きたまま全身の皮をはがれ、間宮は深い古井戸へ飛び込まされる。間宮が闇の中で実際に味わった極限状況と、オカダが近所の枯れ井戸の底で体験する個人の深層意識への旅。この隔絶ぶりが、戦争体験を継承することの絶望的な困難さを暗示していると感じた。

「村上春樹イエローページ」の著書がある文芸評論家の加藤典洋(67)を訪ねた。加藤は「村上の作品には、日本とアジアの関係へ向けた視線が通奏低音のようにある。オカダの行為は、あの戦争とどう向き合うかという戦後生まれの日本人の課題を示している」と語る。「ノモンハン事件は知名度は低い割に、世界的に大きな背景を持つ。それをどう評するかは、歴史認識を測る『試験紙』になる」

ノモンハンで優位を得たソ連は同23日、ドイツと不可侵条約を締結。ソ連と英仏の挟撃を当面避けた独軍は9月1日、ポーランドへ侵攻し、第2次大戦が始まった。ソ連も日本と停戦翌日の同17日、ポーランドを攻略。一方、欧州開戦をお膳立てした形の日本は2年後、南進政策を選んで対米開戦に至る。日本の敗因の多くは、ノモンハン事件でも見いだせるものだった。

何一つ教訓を学ばず、南方で同じ失敗を圧倒的規模で繰り返した――。紀行文「ノモンハンの鉄の墓場」(94年)で村上はそう述べ、現代日本を『一皮むけば、そこにはやはり以前と同じような密閉された国家組織なり理念なりが脈々と息づいている』と評した。個人間の戦争体験の断絶と対置されるのは、一貫して暴力的な国家の本質だった。

＝敬称略

（編集委員・永井靖二）

◇

近年、新たな光が当たるノモンハン事件。作家たちがこの事件を舞台に描いた国家の姿と現地に残る戦闘の傷痕から「近代日本の戦争」を問う。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞　2015年5月8日　夕刊　13ページ　大阪本社

人命軽視の無謀　無反省

敗北の序章　ノモンハン　2

モンゴル東部・ノモンハン戦跡の草原をくぐり、暗褐色のつづら折れの溝が延びていた。塹壕は75年以上を経た今も、姿をとどめていた。

2014年6月、現地を訪れた日蒙共同調査団に私も同行した。最後の激戦地「バルシャガル高地」北縁に旧ソ連軍の陣地跡があった。一行は衛星写真の解析で位置を予測し、小道から約2キロ外れた遺構に到達した。地元の研究者も全く知らない戦跡だった。

高台約1キロの間に4重の塹壕が掘られた、多層防護の構造が特徴だ。旧ソ連軍の野戦陣地の基本形とされる「縦深陣地」だった。随所にさびた有刺鉄線が転がっていた。

調査団が発見した旧ソ連軍「縦深陣地」跡の平面図。約1キロの間に4重の塹壕が掘られている＝山本達也さん作図

五味川純平が怒った「肉攻」

小説家の五味川純平は記録作品「ノモンハン」（1974年）で、縦深陣地に繰り返し言及していた。

『陣地が厚いというか、縦深がともかく深いから、一線を抜いても、二線に引っかかって潰されてしまうんだ』。

作中、従軍の元兵士は語る。

『（敵戦車は）火焔瓶で面白いように燃えた。しかし、あれは窮余の一策だね。まともな戦法じゃない。何十両もある鉄の塊が走って来るんだろ、それへ人間がサイダー瓶を持って跳びかかって行くなんて、正気の沙汰じゃない』

ノモンハンの停戦時、五味川は23歳。『兵隊が支援砲火もなしに戦車と闘わされているということが、強烈に心に灼きついた。いつの日にか、私たちもそうなるであろう』と、当時の感慨を作品の冒頭に記した。そして6年後、関東軍兵士となった彼ははるかに劣勢の戦場へ投入された。

上「フイ高地」に残る旧日本軍の塹壕跡で見つかったサイダー瓶。対戦車攻撃の火炎瓶に使われたとみられる＝2014年6月、モンゴル東部、永井靖二撮影　下ノモンハン事件の前線で旧ソ連軍の不発弾を抱える旧陸軍の兵士ら＝1939年7月

第2次大戦最末期の45年8月13日、彼は旧満州（現・中国東北地方）東部国境でソ連軍戦車部隊に遭遇。中隊158人中、生存は4人。『手榴弾を二発結束して戦車の腹へ叩き込んだが、牛の腹に小石を投げたほどのこともなかった』という。6年間で進んだのは兵器の性能よりも、人間を消耗品と見る日本軍の発想だったと感じられる。

五味川は生き残った兵士らを指揮して満州を逃げ延び、日本へ奇跡的生還を果たす。体験を基にした長編小説「人間の条件」（58年完結）は、全6巻で計1300万部を超えるベストセラーとなった。

「妻たちの二・二六事件」（72年）、「密約―外務省機密漏洩事件」（74年）など、昭和史の裏面を追い続ける作家、澤地久枝（84）は、独立前の63年から7年間、彼の助手だった。既に売れっ子だった五味川は、全18巻の大河小説「戦争と人間」を執筆中。「ノモンハン」は多忙を縫って書き上げた。澤地は「自身の戦場体験も含め、原点ともいえるノモンハンだけは、創作ではなく記録として残したかったのでしょう」と語る。

兵器の劣勢は兵士の血と肉で補われた。『勇敢だけでは砲弾の炸裂には耐えられない』。作中、五味川は軍幹部らの無策を怒りながら慨嘆した。『ノモンハン戦はそれを証明したが、帝国陸軍はその証明を認めようとしなかった。砲火に対しては夜襲による突撃を、戦車に対しては肉攻を、という基本方式を変えることなく、大戦へ突入することになる』

＝敬称略

（永井靖二）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞　2015年5月9日　夕刊　9ページ　大阪本社

断たれた 民族の絆と心

敗北の序章 ノモンハン 3

安彦良和 若者の苦闘

ノモンハン事件で旧ソ連軍司令部が置かれた丘に「モンゴル・ソ連勇士記念碑」が立つ。高さ54㍍の尖塔が、戦車や兵士を模した幅33㍍の銅製レリーフを中空に支える。

モンゴルは事件を「ハルハ河戦争」と呼び、旧日本軍の侵略を盟邦ソ連と退けた「祖国防衛の戦い」とする。記念碑の地元スンベル村には戦勝博物館があり、英雄たちの戦いぶりを展示している。

だが、事件はモンゴルに深く癒えぬ傷を残した。古来モンゴル人は「南蒙古」と呼ばれた中国内モンゴル自治区など、広域で暮らしてきた。2014年11月に64歳で死去した戦勝博物館元館長イシ・ニレバータルは生前、「ハルハ河戦争と以後半世紀続いた親ソ一辺倒の政策で、中国にいる親類や友人との音信は途絶えた」と語っていた。モンゴルの近代史は、現在まで続く民族分断の歴史でもあった。中国東北地方を「生命線」と位置づけていた日本は、その分断の過程に深く関わった。

「機動戦士ガンダム」の作画監督としても知られる漫画家の安彦良和(67)は「虹色のトロツキー」（1996年完結）で、旧満州国のモンゴル系青年ウムボルトを主人公に「五族協和」を唱えた日本の傀儡国家の内実を描いた。

特務機関員だった日本人の父と、蒙古族の母との間に生まれたウムボルトは、関東軍参謀の辻政信に見込まれ、38年6月、首都新京（現・長春市）の「建国大学」へ編入させられる。抗日活動や上海での情報戦に翻弄されながら、満州国軍の蒙古族の部隊「興安軍」少尉としてノモンハンへ赴く。

安彦は「巨大な力がせめぎ合う狭間で弱い立場に置かれながらも、未来を切り開こうと苦闘する若者を描きたかった」と語る。石原莞爾、李香蘭（山口淑子）、尾崎秀実らとの逸話を絡めながら、ウムボルトはノモンハン事件の最前線で消息を絶つ。「国家が語りたがる『大きな物語』ではなく、こぼれ落ちる部分にこそ歴史の真実はある」という思いから、敗者側のしかも少数派を主人公に選んだ。

勝者だったはずのモンゴルには圧政の嵐が吹き荒れた。24年11月に成立した世界2番目の共産主義国家「モンゴル人民共和国」は、ソ連の衛星国としてスターリンの指導下にあった。政治的対立が引き起こした「粛清」が、37年から40年代まで続いた。「反革命」「日本のスパイ」などとして処刑されたモンゴル国民は、政権首脳や軍幹部も含む7万～8万人。ノモンハン事件の死者の3倍に及ぶ。

その実態が研究できるようになったのは、91年のソ連崩壊後だ。立命館大学で2013年春に博士号を得たツムルバータル・ナルマンダハ(35)は若手研究者の一人だ。粛清とその背景まで含めた自国の近代史を調べている。

ドイツ、朝鮮半島、ベトナム――。ノモンハン事件から続いた第2次大戦と東西冷戦で、分断された民族や国家が相次いだ。「忌まわしい過去から目を背けず、事実を解き明かしたい。なぜこんな悲劇が起きたのか、犠牲を無駄にしないためにも教訓をくみ取らなければ」

＝敬称略

（永井靖二）

㊤上官に命じられ、単身で対戦車攻撃の訓練をさせられるウムボルト＝「虹色のトロツキー」（中公文庫コミック版）から

㊦日本と旧満州国の国旗を掲げて歩哨に立つ興安軍の兵士＝1939年7月、ノモンハン

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞　２０１５年５月１１日　夕刊　１３ページ　大阪本社

「餓島」生んだ 軍の硬直化

敗北の序章 ノモンハン ④

作家・司馬遼太郎の若い頃の経歴は、1939年に起きたノモンハン事件と少し因縁がある。

司馬は大阪外国語学校（現・大阪大学）蒙古（モンゴル）語科を仮卒業。学徒動員で旧満州の戦車学校に配属され、ノモンハンで戦った日ソ双方の戦車と間近に接した。「坂の上の雲」（72年完結）で日露戦争に勝利した明治の青年群像を描いた司馬は、同事件をテーマに昭和の陸軍が行き着いた姿を描こうとした。

陸軍の組織が硬直化し、その弊害が露呈した現場が、南北70キロに及ぶ戦跡の最北端にある「フイ高地」とされる。

39年8月20日に始まった旧ソ連軍の総攻撃で、高地は孤立。昨年6月に現地を訪れた調査団によれば、両翼約1・4キロにわたって網目状に塹壕を連ねたフイ高地の陸軍陣地跡を、ソ連側の砲台や戦車壕跡とみられる径10メートル程度のくぼ地が取り巻いていた。その数は440以上にも及ぶ。

司馬遼太郎、執筆を断念

陣地の将兵759人は4日間水もなく、5分間に400発という猛砲撃に耐え、戦車に火炎瓶で立ち向かった。ソ連の戦記は彼らの勇敢さをたたえる。だが、生存者269人を率いて戻った井置栄一中佐は「独断撤退」と責められ、拳銃自決を強要された。

文芸春秋の編集者だった半藤一利（84）は70年代初頭、「司馬さんから『ノモンハンを書きたい。手伝ってくれるか』と頼まれた」と語る。半藤は、第26連隊長として事件を体験した須見新一郎を紹介し、最初の取材は長野県の須見宅まで同行もした。

だが、敗戦時に陸軍の関東軍参謀だった瀬島龍三と「文芸春秋」（74年1月号）で対談したのを理由に、司馬は須見から絶縁された。軍幹部の愚劣さに苦しんだ須見には、元参謀と対談した司馬が許せなかったという。

例えば、ノモンハンで関東軍の作戦主任参謀だった服部卓四郎は41年7月に大本営作戦課長に、関東軍参謀だった辻政信は42年3月に同課作戦班長に就任。ガダルカナル島の作戦を指揮した。物資の輸送能力を考慮せず損害を広げたノモンハンの失敗が拡大再生産され、島は「餓島」と呼ばれた。島での死者約2万人のうち、約1万5千人が餓死か病死とされる。

司馬が苦しんだのは、取材先との関係より、この国が抱える構造的な何かだったのではないか。執筆の見通しを尋ねた半藤に、司馬は「その話は一切しないでくれ」と告げた。『ぼくがノモンハンを書くとしたら、血管が破裂すると思う』『当時の日本陸軍のトップの頭の悪さと、国家保全への感覚のなさに、精神衛生が悪くなってしまう』――。司馬は対談や随筆でそう繰り返し、長編小説で「昭和」を描くことはなかった。

96年2月、司馬は死去。半藤は霊前で合掌し「私が書きます」と誓った。作品『ノモンハンの夏』が約1年後に完成した。半藤は『ノモンハン敗戦の責任者である服部・辻のコンビが、対米開戦を推進し、戦争を指導した全過程をみるとき、（中略）人は過去から何も学ばないことを思い知らされる』と結んだ。＝敬称略

（永井靖二）

上 調査団が作った「フイ高地」遺構図の一部。日本の旧陸軍の壕（右上の青い網目状の部分）を、旧ソ連軍の砲座や戦車壕跡（赤い点状の所）が取り囲んでいる＝山本達也さん作図

下 ノモンハン事件の停戦後、ハイラルの大通りで勝利の凱旋（がいせん）行進をする参戦部隊。大きな損害を出した戦闘の実相には箝口（かんこう）令が敷かれた＝1939年10月11日

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞　２０１５年５月１２日　夕刊　１１ページ　大阪本社

破局への展開 資料が語る

敗北の序章 ノモンハン 5

クックスが残した 兵士の声

ノモンハンの戦跡を訪れた日蒙共同調査団は2014年6月、計3カ所で旧ソ連の超大型陣地跡を確認した。国境から50～90キロ入った大草原。いずれもJR山手線を超す外周をもつ対戦車壕は、70年後も人の背丈の深さがあった。

遺留された軍装品や車両部品は1940年以降のもの。ソ連が45年8月の対日参戦で物資の集積や出撃拠点に使ったとみられている。ノモンハン後も対ソ戦を意識し続けた関東軍を上回る規模で、ソ連は日本攻略を準備していた。

第2次大戦の終幕がソ連の対日参戦だったように、その端緒も日ソが戦ったノモンハン事件だったとする見方が欧米に現れている。

『内陸アジアの僻遠の地で戦われたこの知名度の低い紛争が、アドルフ・ヒトラーによるポーランド侵攻、およびその後に続いたあらゆる出来事の導火線になった』。米国の研究者スチュアート・ゴールドマンが12年に出版した「ノモンハン1939 第二次世界大戦の知られざる始点」はそう位置づけた。英国の歴史家アントニー・ビーバーも同年出版の「The Second World War」をこの事件で始め、6年後の日ソ戦で終えている。

世界史上の注目度が高まるノモンハン事件。最も詳細な戦記を書いたのは日本人でもロシア人でもなく、米サンディエゴ州立大学教授のアルビン・クックスだった。彼は30年を超す研究と延べ400人に及ぶ関係者への聞き取りから「ノモンハン 草原の日ソ戦――1939」（原著85年）を著した。

経過の詳しさもさることながら、『間近に迫っていた太平洋戦争から見てノモンハンは歴史の転回点として位置づけられる』と、第2次大戦との連続性に着目した。事件当時の欧州情勢を『第2次大戦の勃発を間近にひかえて急速に破局へ向かって展開』していたと位置づけ、ソ連側の作戦がその情勢と連動していた実態を資料と証言で示した。

事件当時、彼は15歳。戦闘を断片的に伝える米紙の報道が『どれほど私の好奇心をかき立てたか、今でもはっきり覚えている』と序文で記す。

ハーバード大学で博士号を得て50年代に米陸軍の日本軍事史研究部員として来日、事件の研究に没頭した。彼の著作の翻訳（89年）を監修、14年7月に「明と暗のノモンハン戦史」を著した現代史家の秦郁彦(82)はクックスと56年から交流があった。「炊事軍曹にまで詳しく聞く姿勢に感銘を受けた」と話す。

クックスは99年に死去。助手兼通訳として支えた妻久子(88)は米サンディエゴで暮らす。「日本人でもロシア人でもない第三者的立場から記録を残そうとした彼の姿に、多くの元軍人たちも心を開いたのだと思う」と振り返った。

今春もモンゴル東部で現地調査が進む。調査団長の岡崎久弥(52)は「第2次大戦は旧満州で始まり、終わった。その連続性を調査で裏づけたい」と語る。　＝敬称略

（編集委員・永井靖二）＝おわり

㊤旧ソ連の超大型陣地跡で見つかった車両の残骸＝2014年6月、モンゴル東部、永井靖二撮影

㊦日本に宣戦布告して旧満州国へ侵攻し、ハルビン市街へ入る旧ソ連軍の戦車＝1945年

◎ 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。